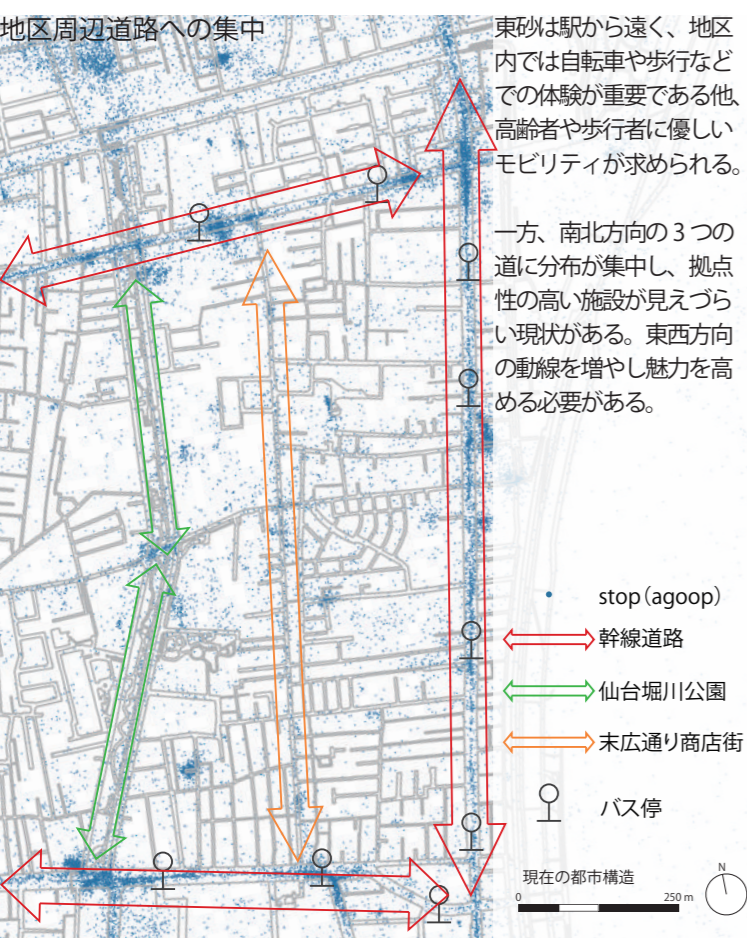


東砂地区内復興計画

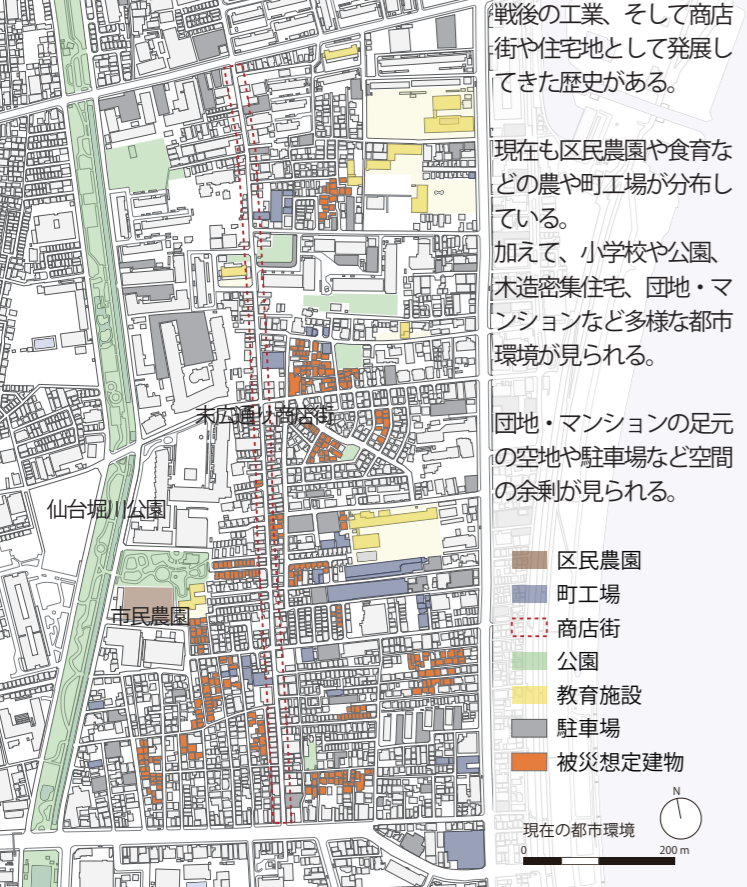
散歩道による風景の継承

須賀拓実 鈴木直輝 高木果穂 日野祐輝

03. 文脈 東砂の都市構造と都市環境



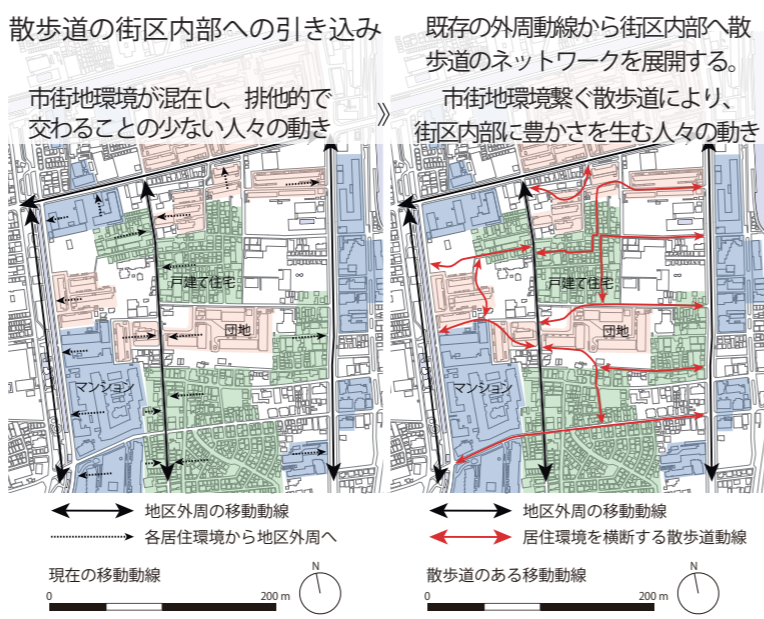
多様な資源と空間の余剰



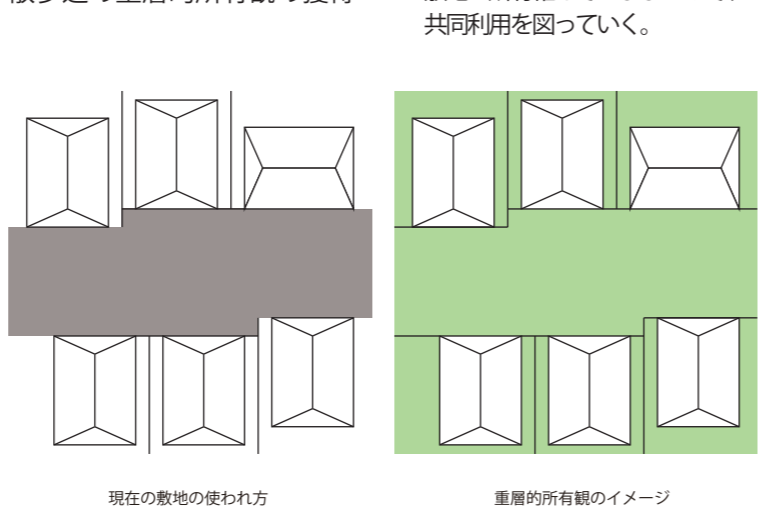
01. 目的 散歩道を通じた地域性の体験とその共有

散歩道に対して、東砂に積層する多様な空間や活動が開かれる。人々は散歩道を通してその風景を共有し、世代や居住環境を超えた共通言語を獲得する。共通言語を元に地域の個性を継承し、地区内復興における空間的互助を生み出す。

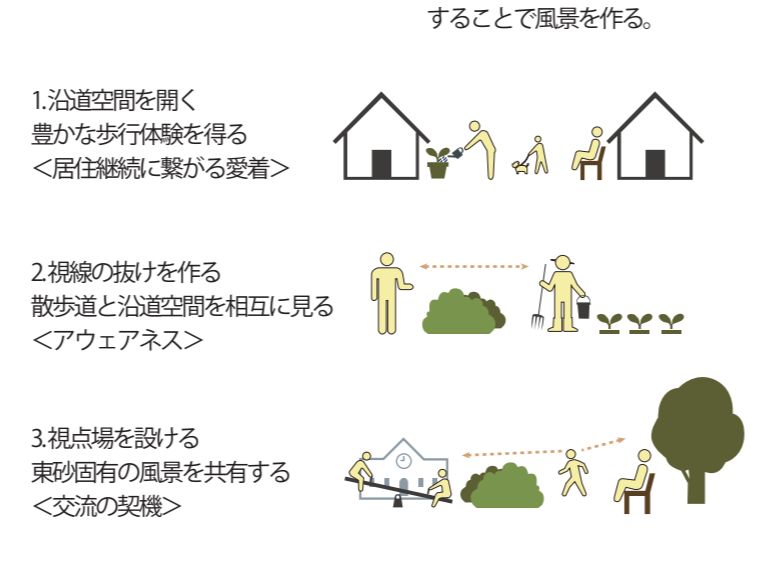
04. 提案 散歩道の風景の共有



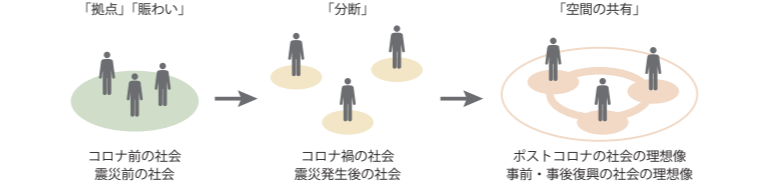
散歩道の重層的所有観の獲得



散歩道と沿道の関係性の構築

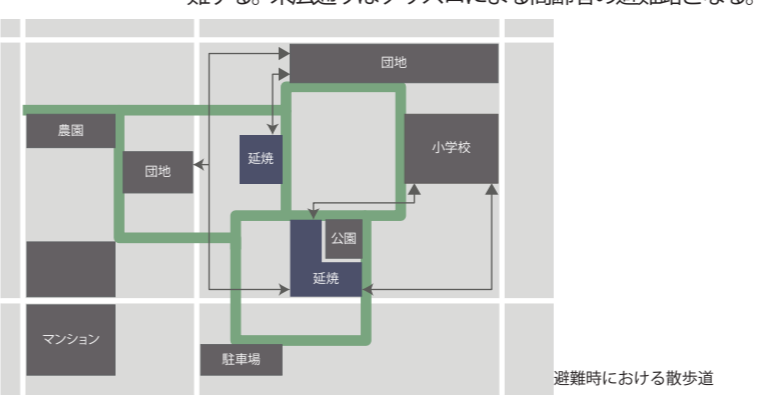


02. 背景 ポストコロナ社会での復興計画

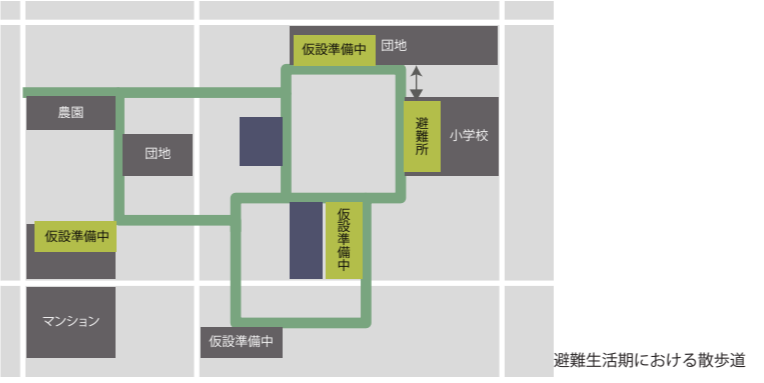


05. 復興 地区内復興における散歩道

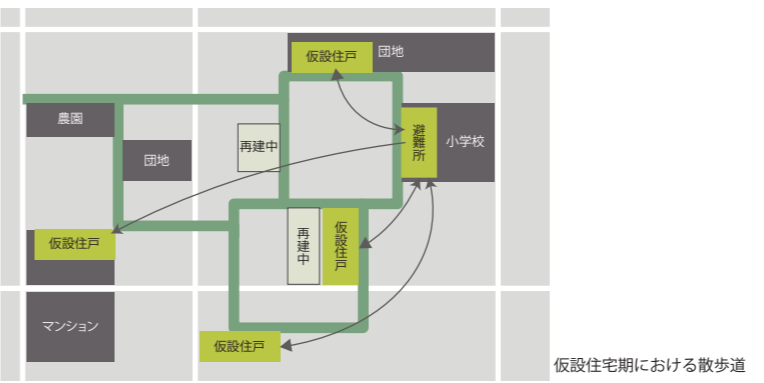
避難時 歩車分離された散歩道によりスムーズに空地や小学校へ避難する。末広通りはグリスロによる高齢者の避難路となる。



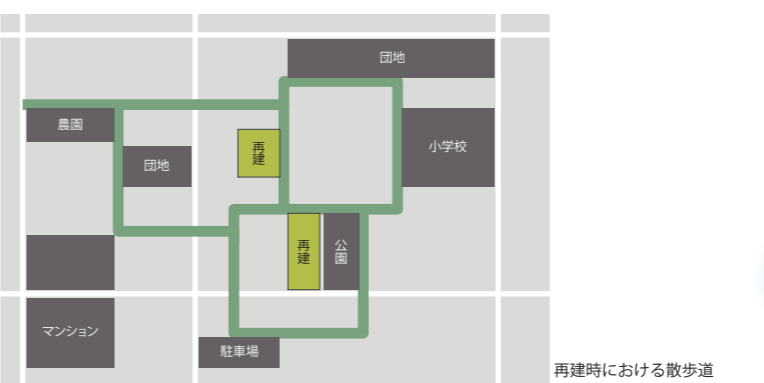
避難生活期 小学校や空き住戸で避難生活を送りながら、散歩道への外出で健康維持や人との交流を図る。



仮設住宅期 集合住宅の足元や公園等に仮設住宅が建設される。仮設住宅居住者も含めた地域の人々が散歩道の風景を共有する。



再建時 再建住宅と散歩道との関係を築き、アウェアネスを促進する。仮設住宅用地を散歩道の新たな風景として再構築する。

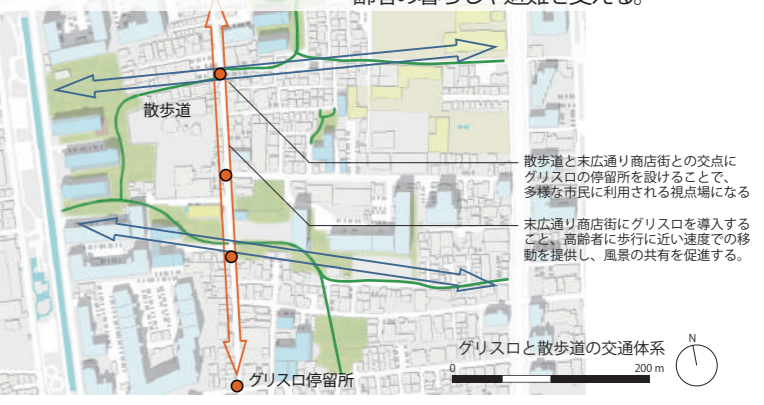


ポストコロナ社会では、フィジカルディスタンスを図りつつも、人のつながりを再構築する共有空間が求められている。

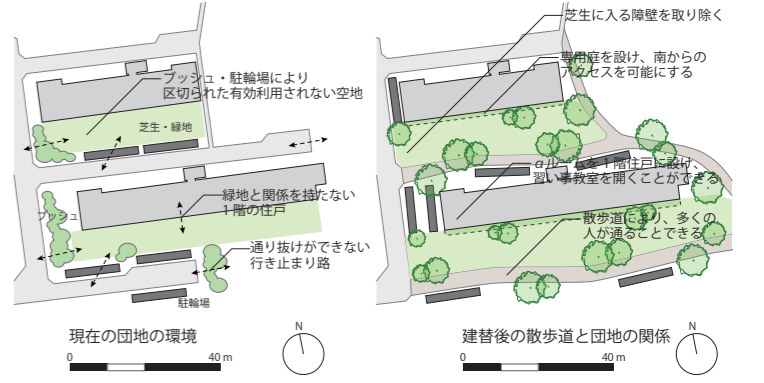
さらに、震災では地区外に移動せざるを得ない人が発生する。多様な都市環境の特性を生かし、空間を共有する地区内復興が求められている。

06. 手法 散歩道の風景の更新

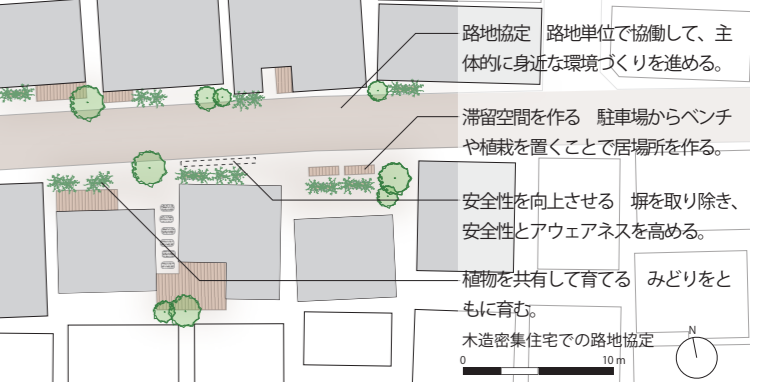
交通ネットワークの再構成 グリスロを導入し、歩行に近い速度で高齢者の暮らしや避難を支える。



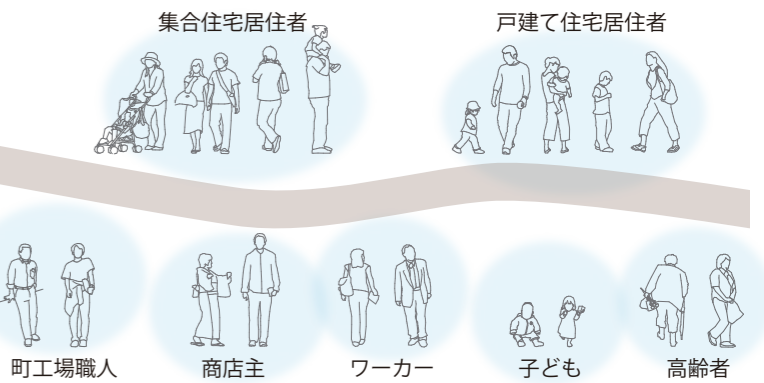
団地・マンションの建替 更新時期に合わせて、散歩道を引き込み、多様なアクティビティを誘発する。



協定による漸進的環境改善 戸建て住宅地では路地協定で、日常生活の関係の中で散歩道を豊かにする。



多様な主体の散歩道の利用 多様な市民が散歩道に立ち寄ることで、世代・属性を超えて風景が共有される。



想定する2050の東砂中心部の様子

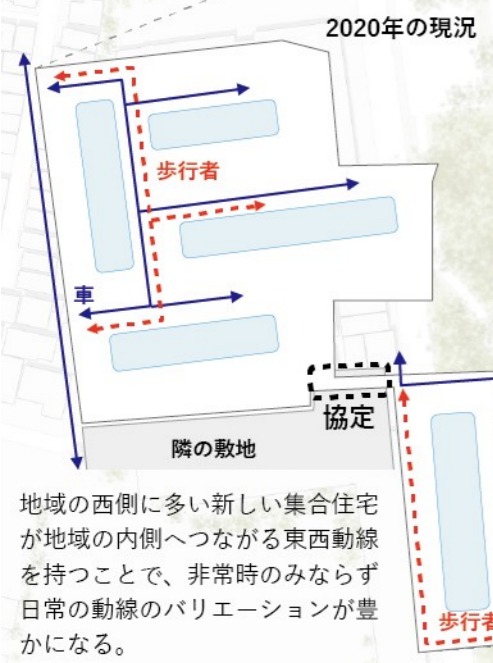


停留所からはじまる風景

地域内の公共交通が手薄な現状を踏まえ、末広通りにグリーンスローモビリティを導入する。低速度で歩行者にもやさしく、災害時には歩行困難者の避難に利用される。停留所は住民が自由に過ごせる空地となり、隣接する町工場では時折子供たちのためのワークショップが開かれる。

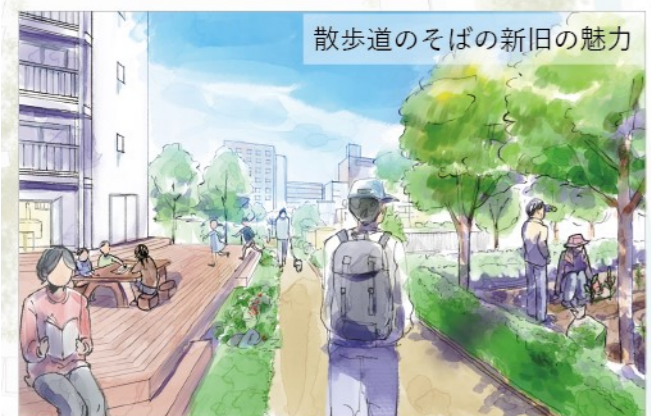
建て替えによる動線の確保

1968・73年造の都営集合住宅計5棟の建て替えによって歩車分離を実現するとともに、既設の保育園と散歩道の持つ関係が地域内の世代間交流のはじまるきっかけとなる。



2020年の現況

地域の西側に多い新しい集合住宅が地域の内側へつながる東西動線を持つことで、非常時のみならず日常の動線のバリエーションが豊かになる。



散歩道のそばの新旧の魅力

墓地に面するなど居住に適さない場所は、その開放性を活かして農園として利用する。回遊性のある散歩道によって地域の新しい魅力が発見され、共有が促進される。



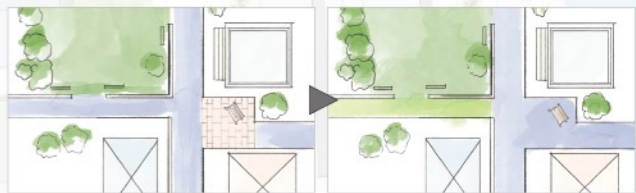
協定による東西軸の歩行者動線の確保

地域内の西側に多く存在する比較的新しい集合住宅が、地域の内側へつながる動線を持つことで、非常時のみならず日常の動線のバリエーションが豊かになる。



道と建物とペーヴメントの関係

散歩道沿いまたは散歩道自体に魅力的なスポットを点在させつつ整備することで、様々な目的をもった人が散歩”道”に集い、景色を共有する。



道は道、空地は空地とわけのではなく、道と道でないところが同じ舗装であることで、散歩道が生活に浸透していき、気軽に歩きやすくなる。そしてそれは、地域全体の道に広がっていく。



“ご近所”で作る、木密住宅の風景

木造密集住宅においては住民の自主的な植栽、軒下の環境づくりによって、地域固有の景観が形成される。



建物種別クラスターの境目から

分棟タイプの集合住宅は特に、歩車分離によって広大な屋外空間を手に入れることができる。更にスローモビリティが導入されれば、より広大な歩行者空間が実現する。

復興過程での動線と公園の整理

災害直後のようす



時限的市街地を指定し、木密地域に点在する公園を活かしながら商業機能の継続を図る

公園のそばで復興をみつめる商店



段階的な地域内復興において、地元商店がその場で継続的に経営することで、地域内で同一の風景を共有できる。再公園化に際して、公園一体の商業活動の展開を見込める。